

Argentina

No. 37

社団法人日本アルゼンチン協会 会報

2002年7月

わが懐かしのブエノスアイレス	1	アルゼンチン応援団長語る	5
日本に戻って想うこと	2	笑顔の日系人世話役	6
敗軍の将に温かいサポーター	4	ハドソンが観察した野鳥を求めて	7

わが懐かしのブエノスアイレス

～20年ぶりの再会～

福島 穆



会報編集委員の福島さんは、JICAのシニア・ボランティアとしてアルゼンチンで勤務されることになり、7月初め赴任された。以下は 着任第1報である。

エセイサ空港に降り立ちましてびっくりしましたのは、空港ターミナルが大幅に拡張されて整備されていることです。remise（電話呼出しのタクシー）の乗り場も増えて、空の玄関としてはなかなか立派になりました。しかし、空港から市内に向かう高速道路沿いのみすばらしい家並みが増えたという印象でした。

[政治経済]

混沌の極みで全く先が見えません。IMFとの交渉も全く見通しが立ちません。ドゥアルデ大統領は来年(2003年)12月が任期ですが、選挙を3月に繰り上げると発表した途端に、1ドル4ペソにまで下落していたペソが、1ドル3.5ペソ台にまで戻すという皮肉な状況です。インフレは、今年前半で累計30.6%です。

以前この会報でもご紹介しましたブエノスアイレス州債の「パタコン」も盛んに発行されておりまして、州政府職員の給料の80%はパタコンによる支払いだそうです。「Lecop」という国の債券のほか各州政府が続々債券発行に走っており、インフレの原因を醸成している感じがあります。この債券は普通のペソ紙幣と全く同じ大きさ、金種も同じで、ちょっと見た目には区別がつかない代物であります。スーパーなどでは表面価格で受け取っていますが、本物のペソに換えようとする、20%も割り引かれるとのこと、それで誰もババを引きたくないの

で、これはせつせと使っているそうです。

銀行預金の引き出し制限も続いており、1週間に300ペソ限り、またドル預金をしようとする、1ドル1.5ペソで換算される由です。それでも銀行の前には長い行列ができております。当然、政府・銀行に対する市民の不満はつもの一方で、例の「鍋叩き」はますますエスカレートしており、場所も大統領府、国会議事堂、オベリスコ周辺で行うので、観光客には迷惑なことであります。円の金利が限りなくゼロに近い日本で、金利のよい価値のあるドル預金にどうして日本人は走らないのかといふかられる次第であります。

[社会情勢]

失業率が25%という状況を反映して町の治安は極めて悪化しております。あの歩行者天国のフロリダ通りで、こどもが物乞いに近寄ってきたり、乳児を抱えた母親がお金を無心する姿には唾然としました。タクシーが強盗にはや変わりしたり、ケチャップをかけて別の人をふき取る風をして盗みをしたり、誘拐事件も頻発しているようでして、昔を知る人にとっては何ともやりきれないところでもあります。住宅地の至るところで、夜間、ごみ袋を破って少しでも金になる物、ダンボールやビンを引っ張り出そうとする人々の姿が多く見られるのも以前には全くなかったことで、昔を知る人には悲しい光景として目に映ります。

電話の通じなかった時代をご存知の方には信じられないことですが、今では日本並みに電話がよくなりました。街じゅう至るところに“locutorio”という看板が



目につきますが、これは公衆電話、ファックス、インターネット、Eメールなどを備えた場所で、多くの人々が利用しております。1925年に作曲されましたタンゴの名曲“A media luz”（淡き光に）の1節「呼べば応える電話」の再来で、これは結構なことであります。携帯電話も大いに普及していますが、日本のように若者がどこでも携帯を見ている光景はありません。この他、民営化により郵便、宅配便のオフィスが数多く見受けられるのも「変わったなあ」との印象を持ちます。

[観光客]

為替レートは、日本流に申しますなら、丁度360円時代に戻ったようなものですから、今のところはドル保有者には、物価が安く感じられまして、早速ブラジルあたりの観光客が、毛皮やカシミアの店に入っているのを見かけます。Casa Lopezでカルピンチョの手袋の価格を聞いてみたら190ペソです。1ドル1ペソ時代は、これがそのままドルの値段だったのが、今では50ドル程度となった訳です。

食事も10ドルで立派な食事ができますので、おいでになるなら今のうちですが、安全とのバランスで判断致さねばなりません。

[ディセポロのタンゴが生きている世界]

20年ほど前の軍政時代、丁度マルビーナス戦争を境に、今と同じようにペソ高ドル安から急激なペソ安ドル高へと大変化がありましたが、今回も全く同じような道を歩んでいるようです。そして残念ながら、もっと悪くなって行くような不安を感じます。マルビーナス戦争といえますと、Plaza San Martin広場に戦死者の名前を刻んだ碑が建ち、永遠の灯が燃えている光景は悲しい限りです。今年で20年になります。

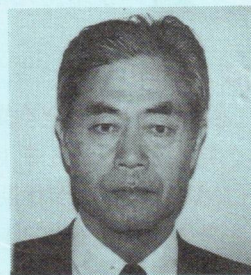
どうもアルゼンチン社会は、1930年代に、タンゴの鬼才ディセポロが作り出した名曲Cambalache（古道具屋）や、Yira Yiraの歌詞そのものであります。1日も早い回復を願わずにはられません。

（ふくしま あつし、協会員、JICAシニア・ボランティア ブエノスアイレス駐在）

日本に戻って想うこと

豊田 潤一

昨年2001年の9月末に約7年ぶりにブエノスアイレスから戻って来ました。若いころ72年から約5年間ブエノスに駐在したものですから、合計12年になります。それ以外にもパラグアイのアスンシオンに赴任しており、しょっちゅうブエノスには出かけていましたので、15年近く日本の対極にあるアルゼンチンという国と関係をもってきました。今回で駐在員としての同国との繋がりは最後となるでしょうが、やはり日本に戻ってからも気になる存在ということに変わりなく



時々 web site で La Nacion などを読んで現地の状況がどうなのかチェックしています。

アルゼンチンをご承知のとおり移民の国です。アルゼンチンのスペイン語は正当なスペイン語とは違うとよく言われるようになりました。そして文豪ボルヘスの有名なアルゼンチン人に関する定義が出てきます。曰く“アルゼンチン人とはスペイン語をしゃべるイタリア人で英国人のように着飾り、フランス人のように振舞う人たちである”。

一般論を言えば、ラテン気質であり陽気で外向的でありませんが、ワインと同様南米特有の太陽と土と水の影響(?)か、ヨーロッパの正当(genuine)なラテン気質、文化と異なった“泥臭さ”とでも申しましょうか、一種独特の雰囲気を持っている感じがします。これは日本のように単一人種で農耕生活で和を基に生活を築いてきた日本とは異質です。長年アルゼンチンに生活をしてきた身からすると、日本の生活はこれはこれで気楽で快適ではあるのですが、時々なにか物足りなさを感じる時がないわけではありません。

現在、アルゼンチンの日系人の社会ではカラオケ大会が盛んで、私も一度審査員として狩りだされたことがあるのですが、日本語があまり得意でなくても、演歌が大変上手な二世や三世のかたが多いことにびっくりします。ご記憶の方もおありでしょうが、昨年アルゼンチンで行われたNHKのど自慢大会で優勝された大城バネッサさんは日本で行われたチャンピオン大会でも優勝して、しばらくしたらプロとしてデビューされるそうです。

現在でも日本からタンゴのダンスを習いにアルゼンチンへ来られる日本人、特に若い女性のかたが結構おられます。私も知り合いの方が習いに来られていて時々お話をしましたが日本人に難しいのは、フロアーに踊り相手を探して出て行くときに目と目で意思の疎通を行うのだそうですが、日本の文化の中で育ったしとやかな人間にはなかなかできないと言っていました。

経済分野では日亜経済合同委員会が原則として毎年東

京とブエノスアイレスにて行われており、お互いの経済交流をさらに強化しようという意図のもと、様々の分野での話し合いが行われてきましたが残念ながら確固とした成果が出せない状況です。日本には資源がほとんどなく歴史的にも海外より原材料を輸入し、それを加工して貿易立国として成長してきたことは周知のとおりですが、かたやアルゼンチンは世界でも有数の資源大国で石油・天然ガス・鉱物資源・食料・森林とどれをとっても豊富です。日本にはこれら資源の開発のために必要な技術と資本があり、お互いに補完関係にあるため協力する余地は非常にありますが、いろいろ他の理由からこの点での協力が十分行われていないのは残念です。やはりアルゼンチンはいまだに目がまず祖先のヨーロッパをみており、逆に日本は経済的に身近で経済発展の躍進が著しい中国や東南アジアへ目が行きがちであるためどうしても日本とアルゼンチンとの経済協力、交流が一直線に強固になることではなく、どうしても紆余曲折が出てくるわけです。

以上、いくつかの分野におけるアルゼンチンと日本の対比をあげてみたのですが、いずれにしても地理的には地球の対極に位置する両国がその地理的ハンデ、文化的異質性、歴史の違いはあるものの、これからますますグローバル化の環境の中で、補完しあう関係を創出することは両国はもとより世界にとっても有益なことだと思いますので、少しでも関係強化のために微力ながら協力してゆこうと思っています。

(とよだ じゅんいち、協会理事、インフォセック代表取締役社長、前三菱商事アルゼンチン社長)

学生会員を新設

当協会の第46回総会は、6月14日東京の日比谷ダイビルで開催された。

議決事項以下のとおり。

- 平成13年度事業報告と決算を承認。平成14年度事業計画と予算案を承認。
- 定款の一部改定を議決。学生が年額3,000円で会員になれるよう学生会員制度を設けた。
- 法人代表の3理事の交代を承認した。(ABC順)
交代就任理事

藤森康雄 三井物産戦略研究所 ユニット長
星野 守 三菱商事地域統括部 チームリーダー
森永 堯 伊藤忠マネジメント

コンサルティング社長

- 次の新任3理事を選出した。

壽岳和子 (財)日本科学技術財団理事
木島輝夫 前駐アルゼンチン大使
豊田潤一 (株)インフォセック

代表取締役社長、
前三菱商事アルゼンチン社長

同じ日開かれた理事会で、斉藤英四郎会長死去に伴う後任会長の選出について協議したが、後任選出にはいたらず、理事長を中心に人選を続けることとした。

敗軍の将に温かいサポーター

アルベルト 松本

アルゼンチンやブラジルなどサッカー王国で代表チームの監督になるということは名誉でありながら“命がけ”の職業でもある。結果が全てであり、いかなる言い訳も通らないしくみになっている。熱狂的なサポーターというよりも国民全体の期待を背負うことになり、失敗が許されないほど大きなプレッシャーの中でいかにベストのメンバーで最強のチームを短期間で築くかにある。

今大会アルゼンチン・チームの監督は Marcelo Bielsa 氏で、それまでスペインのエスパニョールやアルゼンチンの名門ベレスというクラブでの実績を買われて 1998 年に抜擢されたのである。氏はロサリオの出身で、サッカー選手としても地元のクラブ「ニューウェルズ」でディフェンダとしてデビューしている。口数の少ないタイプでメディアとのコミュニケーションがあまり得意でない指摘されつつも、結果を出してきたことで同氏の戦術や選手人選にはあまり批判はなかった。W 杯南米予選でアルゼンチンはトップで進出を果たし有力な優勝候補として日本にやってきたのである。

しかし様々な諸条件（一級の選手、一級のキャンパス等）が整っていたにもかかわらず結果を出せずまさかの第1リーグ敗退になってしまった。昨年の12月からアルゼンチンはもっとも深刻な経済・金融危機に陥っていることで、代表チームは少しでも良い結果を出して国民に喜びと希望を与えたいと言っていたのだが、それもむなしく叶うことは出来なかった。チームが負けたときにはアルゼンチンの一部の都市ではサポーターが暴走化し、傷害事件が多数発生しているが、監督への批判や責任追及が多少あったとは言え、通常の「袋たたき」的な侮辱言動はなかった。

それは、Bielsa 氏の努力と想いが多くのサポーターに理解されていたからである。6月14日同氏が数人の選手とブエノスアイレスのエセイサ国際空港に到着したとき、1千人近くのサポーターが駆けつけたのである。選手たちを讃えるものはなかったが、監督は今までになく非常に温かく迎えられた。400キロも離れたロサリオから来た数人のサポーターは彼に2通の手紙を渡した。到着ホールで読んだ彼はマスコミ陣に囲まれながら涙したという。また、アルゼンチンサッカー連盟は監督の記者会見用の部屋さえも準備していなかったことで、やむを得なく到着ホールで記者たちの質問に答えたのである。彼は失敗を認め、サッカーでは良いチームであっても勝てないこともあると話した。ただ、最強のチームを持ちながら各試合で多くのチャンスを活かせなかったことも敗因の理由であると述べた。

6月30日が契約の期限だったが、AFAから更新の打診もなかったということで静かに任務を終えたという。アルゼンチン代表チームは2006年のドイツW杯に向けて新しいステップを踏むことになるが、選手の世代交代や戦術の見直し、監督や選手の処遇問題（今回 Bielsa 氏は半年近くも給料が支払われていなかったにも関わらず任務を全うしたことが同じように苦しんでいる国民から好感を持ったという節もある）、連盟の癒着構造の改善などが大きな課題であると現地のスポーツメディアは指摘している。

南米のサッカーにはかなり冷酷な側面があるにもかかわらず敗軍の指揮官 Bielsa 氏は、前例がないほどサポーターたちに優しく迎えられ、日本的な「お疲れさま」という言葉が彼の肉体的精神的疲労をあの一瞬エセイサ空港で癒されたのではないかという気がする。（当協会理事）

千羽鶴が結ぶ日ア友好

W杯優勝候補と言われながら予選落ちしたアルゼンチン代表チームは残念ながら早々と日本を去っていった。しかし、はかない滞日ではあったがそこには長田小学校児童との熱き交流の足跡を残していた。

6月1日（土）茨城県境町長田小学校で恒例の全校児童による第14回アルゼンチン友好の日の式典が盛大に開催された。アルゼンチン大使館からフェルナンド・比嘉参事官、櫻倉館員、当協会から野村理事長、藤倉エルダ夫妻が出席した。児童たちはアルゼンチン代表チームの応援のために「サンバ・デ・ミ・エスペランサ」と「島唄」を歌い、

全校生徒による千羽鶴3束を比嘉参事官に託した。参事官は早速、来日中のアルゼンチン・フットボール協会（AFA）フリオ・グロンドーナ会長に児童の激励を伝え、エドワルド・デルカ事務局長に千羽鶴を渡した。選手団は大変喜び児童たちに感謝のメッセージを送った。さらに一行は帰国にあたり、応援のお礼として長田小学校に選手のオフィシャル・ユニフォーム、正式ペナントとキーホルダーを送ってきた。それは同校のアルゼンチン友好資料室に展示してある（写真）。



「若い女性のファンが多いね」

～アルゼンチン応援団長の見た日本～

沸きかえるスタジアムの一角で、「ダウン・ダウン・ニッポン。ダウン・ダウン・ニッポン」腹の底に響く太鼓が鳴り続ける。横浜での日本対ロシア戦。青一色に染まった日本の応援団。その中に同じ青色のジャージーながら、あれ少し違う？ それもそのはず、男の着ているのはアルゼンチンのジャージーだ。男の太鼓に合わせて日本のサポーターがニッポン・ニッポンを絶叫する。

この太鼓の男、アルゼンチンで知らぬ人はいない。ナショナルチームの国際試合には必ず太鼓をひっさげて乗り込み「ダウン・ダウン」。アルゼンチンチームの応援団長である。日焼けした浅黒い顔にもじゃもじゃの髪、よれよれのシャツとパンツにスニーカー。

「なぜTula（トゥーラ）って呼ばれるかって？ 俺の苗字さ。名門なんだぜ。先祖にはアベジャネーダっていう大統領もいたさ。みんなきちんとした奴ばかりだ。俺だけ例外さ。ワッハッハ」反軍事政権のペロン派集会で太鼓を叩いて民衆を励まし、何度も警察のご厄介になった。その後はサッカー応援にのめりこんだ。「ワールドカップサッカーに太鼓を持ち込んだのは俺が初めてさ。ドイツ大会の時ダウン・ダウンとやってたらよ、テレビ中継の音がおかしいとテレビ局に苦情が殺到して次の試合からは締め出されちゃったよ。アッハッハ。今度の日本の大会では、あまりとがめないで太鼓を持ち込ませてくれたよね」

金も栄達も求めない。あくまでも自由人だ。普段は、障害者年金でつつましく暮らしている。海外へ出かけなければならない時は、ファンからのドネーションがあるという。

「今度の大会で、アルゼンチンがなぜ負けたかっ

て？いつも攻めて攻めてはいたが決定的なシュートがなかったよ。初戦のナイジェリアでつまづいちゃったなあ。まあ、優勝候補と言われていい気になってたところもあったかも知らん」



日本を応援する Tula

「日本のファン？ アルゼンチンチームをあれだけ理解してあんなに好意を持って応援してくれるのは世界にないよね。うれしいよね」「日本の応援が少しおとなしいかって？ 日本のファンが試合に感動していることはよく分かるよ。その感動の表現の仕方が国によって違うんじゃない？」「日本のサッカー場を見ると、観客席の格差がなくてシンプルでいいと思うよ。社会が平等なんだよね。アルゼンチンなんか貴賓席とか一般席とか区別があり過ぎてね。」「日本は若者のファンが多いよね。それに女性ファンが多い。他の国では、女性がサッカー場へ行くと嫌な思いをさせられるとかあるから行かないよ。社会というか文化の違いだよ」

—日本のよいところをあげているが、悪いところは？
「酔っ払いだよ。目につくね」

—太鼓続けるの？

「もちろんだよ。俺の太鼓はな。闘いを支援する道具なんだ。サッカーだけじゃない。主張を持っている奴に勇気を与え、表現を強めてやるんだ」

竹を割ったようなスカッとした性格の男 Tula であった。スペイン語でなんと言うのかと訊いたら、二世のアルベルトは少し考え込んでから、「una persona sin vueltas かな」。(取材 河崎 勲、アルベルト松本)



河崎編集長 Tula 松本理事

インタビューこの人 (10)

ブエノスアイレスのニュー・パワー

セントロ日系会長 モニカ小木曾さん



このところアルゼンチンの日系2世たちの活躍はめざましい。アルゼンチン大使館のフェルナンド・比嘉参事官、当協会理事で法廷通訳などをつとめるアルベルト・松本社長、日亜学院のアレハンドロ・島津院長、そして日系2世、3世の団体であるセントロ日系のモニカ・小木曾会長。

W杯訪日サポーターの世話のために来日したモニカ会長に、現地の若者の声を聞いた。

— ブエノスアイレス市の北50キロにある高級別荘地エスコバルの一角にある日本人移住地の生まれ。現地高校をへてサルバドル大学で観光学科を卒業。日本には大阪外国語大学日本語学科に留学。西、英、日3ヶ国語を操るセニョリータ。

子供のときから人種差別を感じたことはありません。同じアジア人でも日本人は中国、韓国とは少し区別されているようです。私たちの親が真面目に働いてくれた賜物でしょう。私達もこれを受け継いで育てていきたいと努力しています。日本から当地に来ている銀行、商社、メーカーの方たちも一様にこの恩恵を受けておられる筈です。これは欧米、他のラ米諸国とはいささか違うのではないのでしょうか。

— いつの世でも、どこでもジェネレーション・ギャップは付きもの。セントロ日系の会員は500名。共通語はやはりスペイン語。一世の諸団体との交流はいまひとつ。現地の日本企業で働く2世、3世は相対的に多くない。

最近になって私たちの意見をよく聞いて貰えるようになりました。一世の方たちはどうしても内に閉じこもりがちでしたので、嬉しいことです。セントロ日系の実働会員は約100名ぐらい。日本企業への就職のお誘いはあまりなく、米州開発銀行とか欧米の企業に就職しています。日本企業より給料は2倍以上でそのうえ権限委譲がしっかりしています。Vivo (ズル賢い) なアルゼンチン人を相手に商売をする訳ですからそれに慣れた、そして親から日本文化の影響を受けたわれわれの方が日本企業の役に立つのでは、と思います。私たちの本心は給料よりむしろ権限委譲に、より魅力を感じます。日本企業のコスト節約のためにも有用ではないのでしょうか。

— 日本の対外PRはいつも今一つの批判がつきまとう。W杯のときも共同ホスト国でありながら韓国の

影に隠れていたと言われている。謙虚さは海外では美德ではない。

アルゼンチン人への日本のプレゼン (告知の仕方) は上手くないですね。日本にはアルゼンチン人を魅了するスゴイものがあるのに、いつまでも「富士山/新幹線/アニメ」です。どうして日本の歴史や文化、生活スタイルなどを上手くPRできないのでしょうか。あのルイス・ボルヘスも日本の文化や宗教を賞賛していました。アメリカは上手いですね。アメリカン・ドリームやライフ・スタイルを見事に浸透させています。

— セントロ日系はこれから現地で有力なニュー・パワーになりつつある。2世、3世グループの情報交換を通じて連帯を強めるほか、現地の日本企業との交流やわれわれ協会との接触を切望している。

協会の方々がブエノスを訪問されれば、私どもが出来るだけお手伝いしたい。本当のタンゴの楽しみ方を紹介します。スペイン語の語学留学や小中学校生徒のサッカー留学もホームステイの紹介とあわせてお手伝いできます。勿論、必要経費は頂きますが信頼できる手配が可能です。このところ治安が悪くなり、こうしたことが重要です。日本の皆さんとこうしてお話できるのがとても楽しく有益です。

— モニカ会長は妹さんとブエノス住まい。ご両親は神戸に在住。礼儀正しく可愛いけどシンのある会長さん。セントロ日系の連絡先はつぎのとうり。積極的にアクセスしよう。

Centro Nikkei Argentino

Bulness 841, 1176 Buenos Aires

Tel/Fax:54-11-4862-7774

centronikkeiarg@hotmail.com

http://www.angelfire.com/ak/CentroNikkeiArg

(聞き手 野村 秀治)

ハドソンが観察した野鳥を求めて

佐藤 幸正

ウィリアム・ヘンリー・ハドソン（1841 - 1922）は御承知のように、若い頃から野鳥に興味を持っていた。彼が生国アルゼンチンで青少年時代に観察した野鳥が、どんな種類のものであったかは、1920年に出版された『ラ・プラタの鳥類』を読めばわかる。

ハドソンはこのなかで190種の野鳥を取り上げ、その色や大きさ、鳴き声や習性などについて述べている。これらの野鳥は作者が渡英する1874年以前に観察されたもので、観察場所についてはラ・プラタ地方が中心になってはいるが、必ずしもそこに限定されているわけではなく、より広汎に渡っている。

ところで現在でもハドソンが観察した野鳥を観察することができるのだろうか。もしも観察できるとすれば、どの程度の割合で観察できるのだろうか。また、もしも観察できないとすれば、どんな原因が考えられるのだろうか。長い間、こんなことに興味を抱いていたところ、幸いにも勤務校から海外研修の機会を与えられることになった。これを機に野鳥を調査することにした。

観察時期や観察場所などについては次の通りである。

1. 観察期間 2000年4月から2001年3月まで
2. 観察場所
 - (1) La Reserva Ecológica Costanera Sur
 - (2) Parque Ecológico Cultural Guillermo Enrique Hudson
 - (3) Refugio Natural Educativo de la Ribera Norte
など、保護区や公園を中心に22箇所。
3. 観察回数 204回
4. 観察された野鳥 225種

以上のことから1年間にわたる観察の結果、225種の野鳥を観察できたのである。アルゼンチンで初めての野鳥観察にしては我ながらまずまずの成果と思う。しかしながらこの中にはハドソンが観察した190種の野鳥のうち、127種しか含まれていない。つまりハドソンが1865年頃に観察できた野鳥のうち66.8%しか観察できなかったことになる。つぎにその原因について考えてみよう。

ハドソンがラ・プラタ地方で観察できた野鳥が、130年以上経た今日、観察できなくなった原因はいろいろ考えられる。まず第一に、ハドソンが当時観察し、その著『ラ・プラタの鳥類』に掲載した野鳥が現在

絶滅の危機に瀕しているか、それとも絶滅した（1種）。第二に、当時ラ・プラタ地方で見られた野鳥が他の地方へ移動した（7種）。第三に、現在種が少数になっているか、減少中であるか、あるいは分布範囲が小規模である（48種）。第四に、その他原因不明（7種）。

ハドソンが観察できた190種の野鳥のうち、今回の調査では63種は観察することができなかった。63種のなかで絶滅の危機に瀕しているのは1種のみであることはアルゼンチンが野鳥の棲息に適しているのかも知れない。しかし他方、かつてはラ・プラタ地方に分布した野鳥が、それを包含するブエノス・アイレス州に存在しなくなった種もいる。種の移動や減少の原因となったものがあるとすれば、それは何であろうか。

ハドソンの自叙伝『はるかな国とおい昔』を読むと、当時は生家の周囲は一望千里、見渡すかぎりの大草原であった。しかし現在では半径2キロ以内に、民家が点在し、近くの道路は舗装され、ひっきりなしに車が走る。文明の進歩とその利器が野鳥の生態を脅かすのに十分である。ハドソンはヨーロッパからの移住者が家畜を飼うために、その土地固有の雑草を刈り取り、牧草を植えたためであると述べている。いずれにしても、人間が及ぼす影響が極めて大であることに変わりはない。

うれしいことに今日でもハドソン公園で、あのハチドリがぶんぶん唸りながら花の蜜をすっている。また、カラチョも時々飛来する。チマンゴは随時見られる鳥で、杭に止まって獲物をねらっている。公園では何といてもテロが幅を利かせており、縄張りに入るなら大変な剣幕で空中から向かってくる。ハドソンの生家を含むこの公園は今なお野鳥の宝庫なのである。

8月4日はハドソンの誕生日。ハドソン公園には近隣からたくさんの人々や生徒がやって来る。盛大に誕生を祝うのである。音楽隊の演奏に合わせて国旗掲揚の段になると、突然名前をアナウンスされ、国旗掲揚の役目になわされた。ハドソン友の会会長ペドロロッチ教授の粋な計らいだったのだが、おおいに面食らった。90歳の誕生日を間近に控えたヴィオレッタ・シンヤ先生はこの日のお祝いに出席し、スピーチをなさったのが印象的であった。

（さとう ゆきまさ、協会員、弘前学院大学教授、2000年～2001年在外研究のためブエノスアイレス滞在）

故斎藤英四郎会長を悼む

アルゼンチンが大好きだった

理事長 野村 秀治

ホテル・ニューオータニの広い駐車場は黒塗りの車で埋め尽くされていた。6月4日のお別れの会には故人の遺徳を偲ぶ2,000人の行列があった。そのなかにはアルゼンチン共和国ハム大使、ルビオ・レイナ総領事も参列していた。ご遺志による簡素な祭壇につづく各国から故人に贈られた勲章が展示された列の最初に、燦然と輝く大きな勲章があった。アルゼンチン政府から贈られた五月勲章グラン・クルス章(勲一等)であった。

18年間も当協会会長を務めて頂いた斎藤英四郎さんは、アルゼンチンが大好きだった。1956年に日本アルゼンチン協会が当時の重光外務大臣に社団法人として設立の認可申請をしたとき、斎藤さんは販売部長(八幡製鉄)として稲山(八幡製鉄常務)さんとともに申請書に名を連ねて居られる。朝鮮戦争ブームが去ったあとの大不況のときアルゼンチンは日本から大量の鉄鋼製品を買いつけた。まさに干天の慈雨だった。斎藤さんは各メーカーや商社の売り込みの陣頭に立たれた。

その後、アルゼンチンは国営の鉄鋼プラントを立ち上げることになり、日本鉄鋼を代表して技術指導を指揮された。かのSOMISAである。ブエノスアイレスで先方と交渉中に軍事クーデターが発生し、目の前で空軍が爆弾を投下するのを眺めたこと、でかいステーキを食べてタンゴを聞いたことなど懐かしそうに語って居られた。

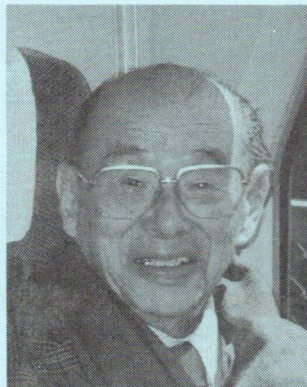
1997年天皇、皇后両陛下がアルゼンチン、ブラジルを訪問される前に宮中で両国関係者を招いたお茶会があっ

た。会が終わるころ美智子皇后さまが、わざわざ斎藤会長のところに行かれ「どうぞくれぐれもお体を大切にしてください」と話しかけられ、直立不動の斎藤さんは声をつまらせて返事にならなかった。

「明るさを求めて、暗さを見ず」をモットーとされた斎藤さんは、ごく最近まで周囲が驚くほど頭はクリアだった。毎年5月に開催される当協会の総会には、必ず

出席され名議長ぶりを発揮された。そのなかでの語り草がある。昨年の総会はアルゼンチン大使館小講堂で実施された。某理事が協会運営について理不尽な批判をつづけ斎藤会長はたまりかねて一喝された。その迫力たるや、温厚な斎藤さんの何処から出てくるのかと一同注目し、「さすが年輪を経た鶴の一声」との賞賛に変わっていった。

日本とアルゼンチンの長い交流の歴史のなかで、斎藤さんが残された足跡は大きい。天下の要職にありながら、諸外国との交流にもきめ細かなご配慮をされ、とくにアルゼンチンとの友好交流には格別のご指導、ご援助をいただいた。飾らないざっくばらんなお人柄はとても魅力的で、私の仕事人生の最終章で斎藤さんの警咳(けいがい)に接したことは、この上なく幸せだった。斎藤さんがアルゼンチンの話をされるときはいつも眼は輝いていた。われわれとアルゼンチンの友人たちは、永遠に斎藤さんを忘れないであろう。(のむら しゅうじ)



ドキュメント

最新アルゼンチン情勢

政治・経済の主な出来事

塩見 憲一

IMFとの経済支援交渉を開始するための前提条件がようやく整いつつあるが、まだ予断を許さない状況にある。国内総生産は14四半期連続マイナス成長を記録。国民生活は極めて厳しい状況にあり、特にこの5ヶ月間で急速に悪化、政府に対する不満がさらに高まっている。

「銀行業務及び外国為替取引の一時停止措置」

2月に最高裁が預金凍結に違憲判決を下して以来、各地で預金引出しを求める訴訟が大量に発生、これに基づく裁判所の仮処分判決で銀行からの預金流出が止まらず、中堅外資系銀行が営業を停止せざるを得ない状況に陥った。この事態を受け、4月22日、中銀は銀行業務及び外国為替取引を一時停止する措置を取った。4月25日には、

預金者が凍結預金を引き出すには裁判所の仮判決ではなく確定判決が必要であるという主旨の法案が議会を通り、金融機関は、26日午後から年金支払いなど一部の業務を行い、29日からは営業を全面的に再開、休業前の状態に戻った。為替市場も同日再開された。

「ドゥアルデ大統領の経済政策骨子」

4月24日、ドゥアルデ大統領はペロン党所属の主要州知事と今後の経済政策について協議を行い、以下の14項目からなる合意書に署名した。

- 国際協約の遵守並びに、国際社会との協調路線を再確認する
- 15日以内に各州政府と財政に関する個別協定を締結する
- 90日以内に新たな連邦税配分制度に関する法案を議会上に上程する
- 物価の高騰と為替不安を回避すべく、均衡を保った規律ある財政政策及び通貨政策を実施する
- 預金者に対し、適切な法的措置を講じることにより、流動性を確保するとともに、預金が今後どのように処置されるかを事前に明確にし、これを保証する
- 信頼できる強固な金融制度再構築に直ちに着手することを確約する
- 国、州、市の行政機関との間で財政責任に関する新たな合意書を取り交わし、信賞必罰を明確にした制度の下、確実にその責任を果たさせる
- 税制を全面的に見直し、脱税、税金逃れ、密輸密売などを防止するとともに、投資の喚起・促進に繋がるような近代的で簡潔な税制を確立する
- 破産法（改定）の早期可決を図る
- 経済転覆取締法の早期廃止を図る
- 集約的労働を必要とする生産プロジェクトへの在外アルゼンチン資本の投資回帰を図る
- 製品輸出或いは輸入代替分野への内外からの投資を喚起する
- 無駄な政治資金及び行政資金を削減し、近代的な選挙制度を確立することにより、公約した政治制度改革を確実に実施する
- 雇用計画立案の体制を確立し、製造部門で実体の伴った雇用が行なわれることに結びつける

本件合意することにより、IMFからの経済支援を受けするための前提条件を早期に満たすことを目指している。

「レニコフ経済大臣辞任、主要閣僚交代」

4月23日、経済省はレメス・レニコフ経済大臣の辞任を発表した。辞任の直接の理由としては、金融破綻を避けるために議会に提出した新BONEX PLAN（凍結預金を国債で支払う方式）が採決見送りとなった責任をとったことが挙げられるが、このほか、先に行われたIMFとの交渉で具体的な進展が見出せなかったことも影響していると見られる。後任の経済大臣選定は、有

力候補が次々と辞退するなど難航したが、25日、EU大使でエコノミストのロベルト・ラバーニャ氏が指名された。又、レニコフ経済大臣に続いてカピタニッチ首相とデメンディグレン生産大臣も辞意を表明、5月3日にカピタニッチ首相の後任としてアルフレド・アタナソフ労働大臣の就任が決まり、労働大臣の後任にはペロン党下院議員グラシエラ・カマノ氏（夫は飲食業界の労働組合代表を務めるルイス・バリオヌエボ上院議員）、又、内務大臣に同じくペロン党下院議員のホルヘ・マッキン氏が就任することになった。尚、生産大臣については後任を任命せず、生産省は経済省に吸収されることになった。

「金融機関動向」

カナダ系のSCOTIA BANK QUILMESは流動性不足により、4月18日から1ヶ月間の営業停止処分を受けていたが、中銀はさらに30日間の営業停止延長を決定した。

5月20日にはフランスの大手金融機関CREDIT AGRICOLEが、流動性の問題を抱える同行グループの現地銀行3行(BANCO BISEL、BANCO SUQUIA、BANCO DE ENTRE RIOS)を手放し、同国から撤退することを表明した。同行グループはアルゼンチンの総輸出の3分の1を占める穀類及び植物油輸出の約半分45億ドルの輸出決済を取り扱っていたが、資金繰りの悪化から決済が滞っていた。中央銀行は経過措置としてこの3行を国営商業銀行BANCO DE LA NACION ARGENTINAの管轄下に置くことを決定した。

尚、1914年営業開始の老舗銀行BANCO EUROPEO PARA AMERICA LATINA (BEAL)を傘下に持つドイツWestLBグループも撤退を決定したと報じられている。

「凍結預金の国債への転換に関する大統領令公布」

6月1日、ドゥアルデ大統領は凍結預金の国債への転換に関する取決め及び、ペソ化により損失が発生した金融機関への補償を主な内容とする大統領令に署名した。基本的には定期預金をドル建て10年国債、ペソ建て5年国債に転換するものであるが、転換が預金者の任意となる点、レニコフ前経済大臣が提案した案と異なる。転換されない預金は従来の払い出し規制が適用される。又、外貨建債権・債務のペソ化の過程で金融機関には多大な損失が発生しており、政府はこの補償として総額95億ドルのドル建て10年国債を付与することを定めた。

「ブレヘル中銀総裁辞任」

ブレヘル中銀総裁が6月24日に辞表を提出し、6月30日をもって辞任することになった。後任にはピニャネリ副総裁が指名された。ブレヘル中銀総裁は金融政策に対し、ドゥアルデ大統領及びラバーニャ経済大臣とは異なる意見を以前から持っており、2週間前に一旦辞意を示唆したが、慰留されていた。同氏は今後ワシントンでアルゼンチンの対外債務に関する交渉窓口になる予定。

「IMF との経済支援交渉状況」

アルゼンチン政府はIMFとの支援交渉開始の前提となる破産法の改訂を行い、経済転覆取締法を廃止、州財政赤字削減協定については主な州政府との調印を済ませたが、実態としては一部IMFの要求を満たすことにはならないような対応となっていること、又、6月1日に発表された凍結預金に関する政策について、凍結預金の国債への転換が預金者の任意となったことなどに対しIMFは懸念を表明していた。6月13日になり漸くアドバンスミッションが派遣され約1週間ブエノスアイレスに滞在、その後ラバーニャ経済大臣がワシントンを訪れ、本格的な支援交渉に入れるのか、成り行きが注目されたが、財政の枠組み、金融システム再構築、通貨政策、中銀の独立性がさらに焦点となり、この4項目を中心とした話し合いが進められることになった。

「マクロ経済情勢と市場動向」

ドゥアルデ大統領就任後6ヶ月になるが、当国マクロ経済は依然としてきわめて厳しい状態にある。中銀の外貨準備は、変動相場移行後の通貨防衛のための度重なるドル売介入により、昨年12月末の19,425百万ドルから、6月12日には9,974百万ドルとついに100億ドルを切った。一方、通貨供給量は昨年12月末時点の10,959.7百万ペソから6月12日には15,164百万ペソまで増加、中銀による通貨発行の増大を示している。

為替市場では、5月20日にフランスの大手金融機関が流動性の問題を抱える同グループの現地銀行3行への追加支援を行わない方針を表明したこと、預金の凍結解除策について預金者の立場に配慮する経済省とインフレ及び為替市場への影響を懸念する中央銀行との間で意見の対立があり金融システム正常化に対する懸念が高まったこと、さらにプレヘル中銀総裁が6月30日をもって辞任することになるなど、その都度ペソ売りが加速した。中銀はドル売介入や大口輸出為替を即座に中銀に集中させる策を講じたが、6月25日には1月の変動相場移行後の最安値である3.86～3.95ペソ/ドルを記録した。

一方、株式市場も金融株を中心に売り込まれ、6月14日まで7週連続の下落を記録、1989年のハイパーインフレ当時の水準である267.73ポイントの安値を付けた。一日の取引高も以前は25百万ドルに達していたのが、現状は2百万ドル程度で、市場関係者からはもはやマーケットと言える状況にないとの声も聞こえる。

「貿易収支」

国家統計院が発表した3月の貿易収支は14.8億ドルの黒字、4月は15.4億ドル、5月は14.8億ドルの黒字を計上、特に4月は単月で過去最高の黒字を記録した。輸出については、変動相場移行後のペソ大幅下落にも拘わらず、価格そのものの低下により期待されたほど増加していないが、輸入が国内景気の悪化及び、ペソ建てコス

トの上昇などにより大きく落ち込みを見せている。貿易収支の1～5月累計は66.5億ドルの黒字となった。

「インフレ率」

国家統計院が発表した消費者物価上昇率は3月4.0%、4月10.4%、5月4.0%で、1～5月の累計は25.9%になった。経済省のデボト副大臣は、2002年の年間インフレ率は50%を超えないであろうと述べている。一方、生産者卸売物価は1月からの5ヶ月間で80.8%と大幅に上昇しており、卸売物価の上昇を勘案すると消費者物価が今後さらに上昇することが懸念される。

「2002年第1四半期GDP成長率」

6月19日の経済省発表によると2002年第1四半期のGDPは2,170.7億ペソとなり、成長率は前年同期比16.3%のマイナスを記録した。これは90年以降最大の落ち込みであり、又、14四半期連続でマイナス成長が続いている。長引く景気後退と、さらにペソ化と預金凍結の影響を受け、投資活動、消費活動、いずれも著しく低下している。国内投資は前年同期比-46.1%、民間消費は-20.9%を記録した。産業別でも全ての部門がマイナス成長となり、特に建設業にいたっては前年同期比41.5%のマイナス成長になった。

「低所得層・貧困層増加」

大統領府の下部情報機関であるSIEMPROによると、低所得層の人口は、全人口の51.4%に当たる18.2百万人になり、今年1月から5ヶ月間で3.8百万人、景気が低迷しだした1998年当時と比較すると7百万人増加している。又、この内、8.3百万人は未成年者であり、これは即ち、全未成年者の3人に2人が低所得家庭に属することになる。国家統計院の低所得層の基準は、現在、夫婦と子供2人で月間収入626ペソ以下であり、その算定の対象となる基礎生活物資の価格はこの5ヶ月間で35.7%上昇した。又、貧困層の基準は、ベースとなる基礎食料品価格がこの5ヶ月間で42.5%上昇、夫婦と子供2人で月間収入266ペソ以下となり、その人口は現在7.8百万人に達している。

「抗議デモで死傷者発生」

6月26日、ブエノスアイレス市内に通じる主要幹線道路の入り口で、失業者を中心とするデモ隊と警官隊が衝突、死者2名と多数の重軽傷者が出た。政府の経済政策に対する抗議デモが、一部の左翼グループの扇動で過激な行動に走ったため、警官隊が催涙ガス・ゴム弾で応戦したもの。翌27日には、前日の死傷者が出たことに対する抗議デモが大統領官邸、国会周辺などで行なわれ、失業者を中心に1万人以上が参加した。

(しおみ けんいち、東京リサーチインターナショナル研究理事)

バンドネオンの名手 池田光夫氏を悼む

蟹江 丈夫

わが国のタンゴ・ミュージシャンの中で大きな存在であったバンドネオン奏者の池田光夫氏は病氣療養中のところ、2002年6月13日逝去された。またひとり、惜しい人がこの世を去って行ってしまった。

池田さんは1927年（昭和2年）、東京の日暮里に生まれ、10代の終わりごろからミュージシャンの道を志し、ギター、ピアノ、アコーディオンを習得、伴薫のタンゴ楽団「メキシカーナ」に入り、活躍を始めた。21歳のときバンドネオンを手にし、教則本も、情報も全くない終戦直後の混乱期にあっても寝食を忘れてこのディアトニック・バンドネオンに取り組み、半年ではほぼ弾きこなせるようになったと、よく当時を回想されていた。この伴薫のタンゴ楽団には先輩として早川真平氏も在団されていたことがある。

1950年（昭和25年）、オルケスタ・ティピカ・サンテルモを旗揚げ、はなばなしく東京新宿の新宿文化劇場のステージに登場した。このとき筆者は、大学受験勉強中であったが神田三崎町の研数学館の教室を抜け出して、昼飯もとらずに神保町から都電に乗り新宿文化劇場へ駆けつけた。丁度幕が上り、テーマの「エル・チョクロ」がミロンガのテンポで演奏されているところであった。空いていた最前列の席で池田さんデビューの勇姿に接することができたのは幸運であった。

このころから池田光夫氏は、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京にゲストプレーヤーとして放送、ステージに必ず参加されていた。早川氏は私に「ティピカ東京のバンドネオンが全部クロマティックなので、ディアトニックの池田いうのを入れています。なかなかよく弾く男です」とおっしゃっていた。新宿のステージでは頭をポマードで固め、当時流行のリーゼントスタイルで真っ白なワイシャツとともにその格好のよさはわれわれの目には憧れの姿とし



て焼きついたのであった。

1952年、TBSラジオは突如、専属制を採り入れ、ミュージシャン、落語家など花形と言われた人々を片端から専属にして行った。この影響をまともに受けたのがNHKだった。NHKは池田光夫氏に白羽の矢を立ててオルケ

スタ・ティピカNHKを結成した。池田さんは、バンドネオンを手に、「今週の明星」や「世界の音楽」に出演したりで大活躍であった。

1970年代から1980年代は、船村徹さんと「おるけすた・ていぴか・につぼん」を組み、NHKにもたびたび姿を見せていた。また、この楽団のアレンジも担当、コロムビアから2枚のLPがリリースされた。交友の広い池田さんは、筆者が船村徹先生とお近づきになったり淡谷のり子さんとも何回も親しくお話できる機会を作って下さった。

池田さんの通夜・葬儀には、菅原洋一さんや、NHK、サンテルモ、ロス・アミーゴスのメンバーら日本のタンゴミュージシャンたちが顔をそろえた。池田さんは日本のタンゴ界だけでなく世界的にも羽ばたいた偉大なミュージシャンであった。私にとっては、目の前に大きな穴がポッカーと空いてしまった感じの昨今である。

（かにえ たけお、協会員、タンゴ解説者）

中南米とのコミュニケーション&ビジネスサポートをおまかせ下さい

アルゼンチン生れの二世 アルベルト松本がお手伝いします

（資）アイデア・ネットワーク 代表取締役

サルバドル大学国際関係学部卒 横浜国立大学大学院国際経済法学科修士号取得

法律及び経済部門の専門翻訳・法廷&ビジネス通訳で活躍中 日西のバイリンガル

http://www.ideamatsu.com 〒223-0055 神奈川県横浜市港北区綱島上町83-1-104

電話/FAX 045-544-0192 携帯電話 070-5218-2050

E-mail: jam@ideamatsu.com

（広告）

案内板

■ タンゴ・メトロポリス

指揮・編曲・バンドネオン：ダニエル・ピネリ
7月6日より8月4日まで全国各地を公演
問合せ：光藍社 03-3943-7531

■ TANGO ARGENTINO

「京谷弘司カルテートタンゴが魅せる
アルゼンチンタンゴの世界」

8月23日(金) 19:00
港南区民文化センター [ひまわりの郷ホール]
3,000円(全席指定) 60才以上2,500円
問合せ：ひまわりの郷 045-848-0800

■ ピアソラへのオマージュ

ーピアソラ・メモリアルコンサート Vol.10ー
演奏：オルケスタ・アストロリコ
歌：ロベルト・デ・ロサーノ
ダンス：ルシア&アルバロ
8月25日(日) 14:00
神戸市産業振興センターホール
前売り 4,500円 当日 5,000円(全席指定)
問合せ：ソルーナ音楽事務所 075-211-9205

■ ウーゴ・デ・アナの「愛の妙薬」

アルゼンチンの奇才、ウーゴ・デ・アナ演出のオペラ
演出・美術・衣装：ウーゴ・デ・アナ
指揮：パオロ・オルミ
8月25日(日)、28日(水) 18:30
8月30日(金) 16:00
新国立劇場中劇場
SS 30,000円 S 23,000円 A 15,000円
B 8,000円 学生 3,000円
問合せ：ラ ヴォーチェ 03-3519-5881

■ 小松亮太プロデュース ピアソラ、別伝

プログラム A:

- 第1部 1940'S 或いは革命前夜
- 第2部 1950'S 或いはタンゴ革命軍団誕生

プログラム B:

- 第1部 1960'S 或いはピアソラの陽の下に
- 第2部 1970'S 或いは新たな挑戦

プログラム C:

- 第1部 1980'S 或いは五重奏団という理想
- 第2部 バンドネオン・シンフォニコ

9月19日(木)、20日(金) 19:00 プログラム A
9月21日(土) 19:00 プログラム B
9月22日(日) 14:00 & 18:00 プログラム C
世田谷パブリックシアター
3プログラムセット券 15,000円 1回券 5,500円
問合せ：コンサートイマジン 03-3235-3777

9月24日(火) 19:00 プログラム A
シアター・ドラマシティ (大阪)
6,000円
問合せ：シアター・ドラマシティ 06-6377-3888

■ 小原みなみ「アルゼンチンを歌おう！」

9月14日(火) 13:00~15:00
朝日カルチャーセンター横浜
朝日カルチャー会員 2,700円 一般 3,200円
問合せ：朝日カルチャーセンター横浜 045-453-1122

■ フランシスコ・カナロ楽団

指揮・ピアノ：ホルヘ・ドラゴーネ
10月15日より30日まで全国各地を公演
問合せ：オフィス・アルファ 052-930-4333
後援：アルゼンチン大使館

■ エンリケ・クッティーニ楽団

10月5日より12月12日まで全国各地を公演
問合せ：ハンブトンジャパン 027-385-4944
後援：アルゼンチン大使館

■ 「島唄」がアルゼンチンで大ブレイク！

アルフレッド・カセーロのCDラティーナWEB ショップにて
絶賛発売中
www.latina.co.jp

■ アルゼンチン大使館ホームページ

(日西両語)
www.embargentina.or.jp

■ ブエノスアイレス日刊紙のホームページ

Clarín www.clarin.com
La Nacion www.lanacion.com.ar

■ 日本で発行のスペイン語新聞 (週刊)

International Press www.ipcdigital.com
問合せ：03-3471-6989 (清水)

日本アルゼンチン協会会報 37号
2002年7月22日発行

発行人 野村秀治
編集長 河崎 勲
発行所 社団法人 日本アルゼンチン協会
105-0004 東京都港区新橋1-17-1
新幸ビル
電話：03-3501-4684
FAX：03-3595-3932
Eメール : argentina@nifty.com
印刷所 株式会社 アイデア・インスティテュート